

## 中国少数民族の文学

馬 学 良

中国は、漢族のほかに五十五の少数民族を有する多民族国家である。あわせて五千八百余万の少数民族が、国土の五割ないし六割をしめる広大な土地に住んでおり、中国の辺境と国境地帯はほとんどこれらの少数民族の居住区である。それぞれの民族には長い歴史があり、その間に各民族のあいだの絶えざる往来と接触によって、文化芸術の分野でもたがいに影響しあってきた。

もっとも激しい変化がおこったのは、一九四九年以後のことである。社会制度が変わり、人間の関係が変わり、民族の関係も変わった。以来三十数年、五十をこえる民族が、近代的な社会主義国家を建設するという共通の願望のために、大家庭のなかで團結してきた。この前進の道は決して平坦ではなかった。曲折もあり、反復もあった。しかし、われわれはなんとか自分の道をさぐりあてようとして、歩みつづけてきた。

わが国を訪問される外国の友人（そのなかには日本の友人も少なくない）は、いつもこう問いかける。「あなたがたは、どのようにして少数民族を團結させるのか。また、どのような力で少数民族を引きつけようとするのか。」これはたしかに探求にあたいする問題である。わたしはいつもこう答えることにしている。——中国政府は社会主義制度をうちたてた。その執行する民族平等の政策は、友好合作の關係をつくる基礎となっている。政治、経済、文化教育に

わたって平等にあつかうという原則と、少数民族が物質面と文化面で生活の改善に努力するのを助けるという方針は、決定的な役割をはたしている。

このような状況のなかで、各民族の文学作品を翻訳して出版するという仕事も、重要な意義をもつことになった。すなわち精神文化のもつ意味をおろそかにしてはならないということである。われわれはこの三十数年のあいだに、少数民族の言語や文学の調査、採集、整理にあたる専門家を養成してきた。いまでは民族別の文学史が執筆されつつあり、また、民族別の言語志、言語概況、文学概況などもあいついで出版されはじめている。

少数民族の文学作品を翻訳して出版するという仕事に関連して、三つのことにふれたい。

第一に、それは漢族人民の少数民族に対する見方に、大きな影響を与えたことである。北京の中学生の一人は、タイ族の叙事詩「スートン王子（召樹屯）」を読んで感激し、雲南のタイ族地区に下放することを志願したという。歴代の統治者や大民族主義者たちは、少数民族を野蛮で粗野なものとしておとしめてきた。しかし、いまでは多くの人たちが、チベット族の「ゲセル王伝」、キルギス族の「マナス」、白族の「望夫雲」、イ族の「アシマ」、チワン族の「百鳥衣」、モンゴル族の「ジンギスカンと二頭の駿馬」、リス族の「逃

婚調、「タイ族の「孔雀公主」などのすぐれた文学作品に接している。そして、これらの文学作品によって、人々は過去の少数民族に對する偏見をあらためつつある。

第二に、少数民族の文学作品が、中国の文化を豊かにし、作家たちの創作に新しい素材を与えたことである。この例としては、たとえば以下のものが挙げられる。

「文成公主」(話劇「新劇」、京劇、舞劇。もとはチベット族の昔話と芝居)

「蔓蘿花」(映画。もとはミャオ族の昔話)

「孔雀公主」(映画。もとはタイ族の史詩)

「劉三姐」(映画。もとはチワン族の昔話)

「アシマ(阿詩瑪)」(映画。もとは彝族サニ部族の叙事詩)

「アバンティ(阿凡提)」(映画。もとはウイグル族の昔話)

「蛙の騎手」(児童劇。もとはチベット族の昔話)

第三に、少数民族の文学作品は、その民族の歴史、言語、民俗、宗教、文化を研究する重要な資料である。この点については、われわれのあいだには、二つのちがった観点があった。一方は文学鑑賞と教育の見地とを重視するものであり、他方はその科学研究の資料としての価値を重視するものであった。このどちらの観点に立つかによって、文学作品の記録、翻訳、整理のさいにちがった処理がなされてきたのである。この点については、われわれの考えはまだ完全に一致するところまで到達していない。

中国では、三十余年にわたる少数民族の民間文学の採集、整理、翻訳の仕事は、平坦な道を行ってきたわけではない。われわれは、すでに一九五八年に、「全面採集、重点整理、大力推广、加强研究(全面的に採集し、重点的に整理し、普及に尽力し、研究を強化

する)」という十六字方針を、民間文学工作の基本原則としていた。しかし、実践の場では、經驗不足も手伝って偏った方針がとられがちであった。とくに四人組の時代には、民間文学は「封建的な迷信を宣揚する大毒草」とされて、「全面採集」どころか、「禁区」のあつかいを受けることになった。とりわけ問題視されたのは、宗教とかかわりのある民間文学であった。

多くの事実が証明しているように、原始社会において、宗教觀念は人々の生産や生活や戦争と切りはなすことのできないものであった。そこからさまざまな神話伝説が創作された。民族学が教えるように、「トーチム崇拜」を主題とする神話は民間創作のなかで重要な地位をしめている。われわれはまた、多くの民間創作が宗教儀式的なかで保存されたことを知っている。宗教儀式的なかには、対歌があり、鼓舞があり、短劇がある。たとえば人類の祖先を語る神話として知られるミャオ族の洪水故事も、そのような世界で伝えられたものであろう。とすれば、宗教とかかわりのある民間文学をあつかに当たっては、たらいの水とともに赤兒を流すような愚行を演じてはなるまい。

「四人組」の失脚後、極左思想を肅清する風潮のなかで、われわれの民間文学の領域でも、一部の人が「改旧編新(過去の民間文学作品は今日の観点から書き改められなければならない)」という誤った主張を提出した。この主張にしたがえば、ギリシアの神話も、インドの史詩も、今日の新しい考えと新しい要求によって手を加えることになる。そうならば、われわれは過去の時代の民間文学作品を本来の姿で見られなくなり、その作品のはっきりした時代的特色を読みとれなくなるだろう。そして伝統的な民間文学は、「しだいに消え失せ」、「人為的に淘汰されてしまう」にちがいない。こ

れについては、雑誌『民間文学』でも批判されていることであるから、これ以上はふれない。

最後に、検討すべき問題として少数民族の民間文学の翻訳についてとりあげたい。

わが国の少数民族のうちには、自民族の言語を有しながらも、それを記録する文字をもたないものが多かった。そのため民間文学はおおむね口頭伝承にたよってきた。このような場合、とくに忠実な記録が必要とされる。まず国際音標記号で言語を記録したうえで、その音系を分析整理し、その言語の音声にもとづいたラテン字母の符号を考案する。しかるのちに、歌謡や長い昔話の忠実な記録が可能となるのである。

さらに、その翻訳にあたっては、原意に忠実であるだけでなく、もとの言語にも忠実でなければならぬ。しかも、言語の内容は広く社会生活の各方面をふくんでいるから、その言語を使用する人々の歴史や風俗習慣にも留意しなければならない。たとえば、広西のあるヤオ族のことばでは、「ふたつの村の人」という語が「夫婦」を示している。これは、古代には一つの村には一つの姓しかなく、同姓は結婚しないために、よその村のちがった姓の男女でしか夫婦になれなかったからである。イ族のことばでは、「結婚」という語を直訳すると「妻を略奪する」という意味になる。これも古代の略奪婚制度が反映しているのかもしれない。

また、これらの民間文学の出版にさいしては、われわれは記録した原文と翻訳とをそれぞれ出すことを提唱している。文字のある民族の場合は、その民族文字で記録した本と漢語に翻訳した本とを出すようにしている。たとえばチベット語と漢語とで出した本としては、「倉洋嘉錯（六世ダライラマ）情歌」、「ミラレバ伝」、「サキヤ

格言」、「語りおわらぬ物語」、「ゲセル王伝」などが挙げられる。

わが国の少数民族は、ミャオ族が七つの省区にまたがり、イ族が四つの省区にまたがるというように、集落が小さく分布が大きい居住形態をとっている。少数民族の口頭伝承は地域によって異なり、とくに何十万行にも及ぶ史詩の場合は錯脱や異文が多いため、比較校訂によって正確な整理と翻訳をしなければならない。

このような仕事にたずさわる人材を養成するために、全国の十カ所の民族学院に語言文学の専攻が作られており、中央民族学院では二十四の少数民族についての語言文学専攻が設置されている。われわれは習得すべき言語に関して、聴き、話し、読み、書く能力を身につけることを基本にしている。チベット語を例にとると、この三十数年のあいだに、中央民族学院だけで七百八十二人を養成した。この過程で少数民族出身者の文学的才能を発掘することもでき、各民族の民間文学を育てるために大いに貢献しているのである。

（ま がく り よう・中国民間文芸研究会副主席）